

2021年4月21日

2021年春 -このような時だからこそ、しなやかに思考して-

九州工業大学学長 尾家祐二

この四月、学部、大学院に1,673名の新入生を迎えることができました。大変嬉しいことです。女子学生は、学部では3年次編入学生を含み、16%を超える166名が入学しました。また、コロナの影響により前年に比べ半数以下に減少してしまいましたが、留学生も11の国と地域から33名が入学しました（歓迎のパネルも掲示しました。末尾に添付しております）。入学した留学生の半数程度は、まだ日本に来ることができない状況です。感染症の終息を祈るばかりです。

世界中が、今もなお新型コロナウイルス感染症への対応に追われ、まだ安心できる状況ではありませんが、今年は感染防止対策を講じて、3月に学位授与式および4月には入学式を2年ぶりに行うことができました。また、入学式が中止となってしまった昨年度の新入生諸君に対しては、1年遅れとなってしまいましたが、入学式の代わりに4月に歓迎の集いを行うことができました。学位授与式、入学式、および歓迎の集いでは、学生諸君の元気な姿、楽しそうに記念撮影をしている姿を見ることができ、嬉しく思いました。

このような中、ヨーロッパでは、2020年12月31日に英国がEUを離脱し、米国では、2021年1月にトランプ氏に代わってバイデン氏が大統領に就任しました。その他、経済危機や国家間の緊張が増すニュースが報道され、経済格差、民主主義のあり方など様々なことについて考える機会も増えたと思います。

芥川賞作家・堀田善衛氏は「戦後の焼け後の混沌たる情勢」を経験し、歴史をさかのぼり“乱世”の時代を生き抜いた人たちに焦点を当て、鮮やかに切り取って見せてくれています。著書「時代と人間」の中で、源平騒乱、遷都、地震、大飢饉ありの乱世にあって冷静に世の中を見る鴨長明の言葉を紹介しています。『この国は小国にて、人の心ばせのおろかなるによりて、緒の事を、昔にたがへじとする似てこそ侍れ』と語っている。この国は小さい国で、ひとびとの気までが小さく愚かで、何でも先例、先例とあってどうしようもないというのである。「方丈記」で知られる鴨長明は平安時代末期から鎌倉時代初期に生きた歌人・随筆家で800年以上も前の言葉ですが、今でも、心に留めておきたい言葉です。

さらに、堀田氏は宗教戦争が続く混乱の中に生きたフランスのモンテーニュを主人公とした長編小説を書いています。その中で、モンテーニュが、裁判官も務めていながら、「納得できない場合には、少なくともそれを未決のままにしておかなければならない。なぜなら、それらがあり得ないことと認めつけてしまうのは、可能性の限界を知っていると自惚れる、大それた思い上がりだからで

ある。」と述べていることを紹介しています。

精神科医で作家の帚木蓬生（ははきぎ ほうせい）氏は、このように未決のままにしておくことを重要な能力だと指摘しています。「私たちの人生や社会は、どうにも変えられない、とりつくすべもない事柄に満ち満ちてい」と指摘し、課題を的確かつ迅速に解決していく能力だけでなく、その真反対の能力、負の能力とも呼べる、ネガティブ・ケイパビリティの大切さを述べています。そのネガティブ・ケイパビリティを「論理を離れた、どのようにも決められない、宙ぶらりんの状態を回避せず、耐え抜く能力」として紹介しています。「その先には必ず発展的な深い理解が待ち受けていると確信して」、「拙速な理解ではなく、謎を謎として興味を抱いたまま、宙ぶらりんの、どうしようもない状態を耐えぬく力」とも説明しています。これは、多様なものを受け入れる寛容な心にも通じます。

今、この不確定で不透明な時代を経験している若者が、困難に遭遇して思考を硬直化させることなく、しなやかな思考を育てて欲しいと願っています。場合によっては、拙速に答えを求めず、保留できるところは保留にするという選択も必要になります。私たちも、このような時だからこそ、しなやかに思考し、先例やこれまでの枠にとらわれず、企業、大学等を含めた社会との関係を見直し、大学の役割を見直すことによって、新たな関係を作り上げ、新たな役割を果たし、大学の社会的価値を創造していきたいと考えています。

本学は、引き続き学生、職員及び関係される方々の健康と安全に配慮し、学内外の多様な知恵を集め、未来社会で活躍し続ける人材の育成と新たな知の創造のために、今年度も様々な試みを行って参ります。ご理解並びにご協力よろしくお願い申し上げます。

(参考)

- ・堀田善衛著「時代と人間」徳間書店
- ・堀田善衛著「ミシェル 城館の人」集英社文庫
- ・帚木蓬生著「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力」朝日新聞出版



留学生向け入学歓迎パネル